巻頭言

私たちの生き方を問う

――本妙日臨と優陀那日輝の場合――

現代宗教研究所長　三　原　正　資

平成三〇年一月、御年頭会の身延山は冬晴れの光に溢れていた。梅平を走る車から波木井の山を見ていると、五〇年余り前の本妙庵の光景、日臨（一七九三―一八二三）が坐ったという地中の禅定窟や彼が見たであろう富士川の流れが目に浮かんだ。その頃の本妙庵は室住一妙先生が居住されたあとを日高白象師が守っていた。私は日高師から「醍悟園本妙庵」の鮮やかな朱印が押された一冊の『本妙日臨律師全集』〔以下、臨全〕をいただいた。時折ページをめくり、室住先生の言う「本妙さん」の心にふれるようにした。

今、日臨の略年表（臨全）をみると、日臨の生まれた寛政五年（一七九三）には、「不受本妙日珠強義を以て幕府を諫暁三宅島配流」、寛政七年には「春京要法寺仏像を廃し文字本尊を勧請。十五山これを難じ。紛争爾来数年解決せず。八月幕府上総下総に於て強義を厳禁。九月不受禁制出づ」、享和元年（一八〇一）には「二月廿六日事成日寿祖書綱要刪略の業を終了　（略）十一月身延、池上、妙満寺より檀林修学、階級住職次第衣帯等の調書を寺社奉行へ提出」と、教団の動きが伝わる。

寛政八年には「八月十六日女犯の僧七十余人を日本橋に晒す」などの事件が仏教界を揺がせた。社会では文化一四年（一八一七）には「正月平田篤胤出定笑語附録を出版本宗を誹謗す」と本宗批判の動きが見られた。

このような社会的状況の中で二〇代に入ったばかりの日臨は行学に精進した。

甲州へ参り、様子承り候て、雨端と申処の奥山へ参り、先づ七日七夜の行いたし候、此地は真に人倫絶たる処にて、思の侭に修行相成候、其上仏祖の感応唐捐ならず、僅かに七日七夜の唱題三昧にて、修行験これあり候、因て山を出候て、身延山の内閑静なる地を借り、爰にて修学仕罷在候、（「朝田薩庵に与ふる書　其一」　臨全）

ここで日臨のいう唱題三昧による「験」とは何か。蓑輪顕量師は従来のわが国の仏教界がはらむ問題点を指摘している。

おそらく本来であれば、観から導かれる慧の世界があって、それは体験的に導かれるものだと思われるのですが、それを学解によって行おうとしたところに、一因があるように思います。

学解が重視される伝統が、日本の仏教界にはできあがり（平安時代の桓武帝の頃に大きな転機があることは述べました）、そこから、体験としての観の世界が、正面に出にくくなったのではないのかと思います。（『仏教瞑想論』　春秋社　二〇〇八）

日臨のいう「験」とは唱題三昧から生じた、「観から導かれる慧の世界」であろう。それは即身成仏であり、彼の場合、雨乞いや人々の救済の行動となったと思われる。

「身延日修上人説教記録　明治庚寅廿三年十月廿九日　於波木井本妙庵随行　某記」（臨全）の中には、日臨遷化の年は「予が生誕の年に当る」と述べ、身延山七五世法主三村日修師（一八二三―一八九一）は日臨の逸話を語る。

律師御存生中には泊り掛けの説教と云ふがありて、夏分など近村の者共に徹夜法話をなされて仰せらるゝには、各々倦み疲れて眠を催せば其処に寝らるべし、予も疲るれは又此侭高座の上に眠るべければとて、或は眠るものあり、或は覚むるものもあれば、此の覚むる者の為に御説法なされ、師御自身も眠り度なれば一睡して、覚むれば又々法話なされたしと。

その法話は日臨の著述にうかがうとして、何よりも、この「泊り掛けの説教」の一夜に即身成仏の妙相を観たいと思う。

ところで、この一夜の聴衆の中に堯山、後の優陀那院日輝（一八〇〇―一八五九）の姿を想像してもよかろう。

「本妙尊之説仏祖之底意ニかなひ申べき事のみニて落涙致候事も多々御座候。」（「堯山師より野口寛左衛門に贈る書」　臨全）と日臨に師事した日輝は、近親者に次のように信仰を吐露した。

臨終之用心第一也、妙法経力即身成仏と信しなから死をいとひ、恩愛を願ひなば是転倒也、此身をすて奉なば、妙法受持の功徳に因て直に仏となり、大菩薩と共に有縁無縁の衆生を利益せんと楽みに思ふて、今生の夢中の煩悩に心を不止、唯一心に妙法を念唱し玉ふべし（「堯山師より母公及兄上に寄する法門」　臨全）

この波木井から送られた若き日輝の書簡は心をうつ。

さて、「祖書は末法の妙経なり」（「朝田薩庵に与ふる書　其一」　臨全）と仰ぐ日臨と、富永仲基や平田篤胤によって唱えられた大乗非仏説論をうけて、「作者釈尊ニアラズトモ経文ニ順ジテ釈尊ノ説トスルニ何ノ不可カアラン。経ハ作者ニハ拘ハラズ唯タ其理ヲ勝ルヽヲ取テ可ナリ」（『庚戌雑答』　充洽園全集〔以下、充全〕四）と応じた日輝の姿勢には時代の条件による相違がうかがえる。源了圓氏は「儒教合理主義の知的洗礼を受けた日本人は、もはや迷信も中世的世界観も信じなかった」（『徳川思想小史』　中公新書　一九七三）と論じた。日輝は、かつて仏教の三世観を信じていなかった（『最実事論』　充全四）と述懐し、

後五百歳宗門草創ノ時ハ……口業唱題ヲ先トスルナリ。今時王法隆盛文華興茂ノ時ニ至テハ……意業最モ精進スベシ　（『双照事観修相篇』　充全四）

と考え、本宗僧侶が仏教＝法華経の思想を体現し、社会へ積極的に貢献することを願った。「全仏　仏歴二五六一年（二〇一八）一月」（全日本仏教会）の中で、「僧侶の社会貢献と

はなんですか」と問われた蓑輪顕量師は、次のように答えている。

人々が悩みや苦しみから逃れられるようになることではないでしょうか。同時に他者のことを考えられるように変わっていくことも、仏教の社会貢献だと考えます。中村元先生は「社会に対して良質な価値観を提供する」という表現をしていました。

日輝は自ら修した事観の慧を次のように表現した。

夫現前事相ノ妙法ヲ観スルニ天気地味山薬海藻食シ来テ自己ノ身肉トナリ、自身ノ皮膚毛爪垢穢便塵下シ去テ千山万田人民鬼畜ノ食因トナリ肉因トナリ、又天雨海水渓流叢露来テ自己ノ潤膏トナリ……（『妙宗本尊略弁』　充全三）

現代の生態学の記述と見まちがうようだ。また「本宗ノ学者日々ニ教相ヲ論ジテ修行ヲ進メズ」（『教観進退略鈔』　充全四）ということばは、今日の私たちに迫る。

『ブッダたちの仏教』（ちくま新書　二〇一七）〈あとがき〉に、「長年宗門系大学の教員として仏教学研究と教育に携わり、外からではあるが、宗派や寺院、僧侶など仏教界をみてきた」という著者・並川孝儀氏は、次のように提言している。

仏教とは仏教者の生き方それ自体を問うた宗教であるので、今の仏教を問うことは取り

も直さず僧侶の生き方を問うことである。（略）こうした問いかけは現代において僧侶とはどのような存在なのか、その存在意義はどこにあるのかという問題に帰結する。

だが、人口減少の影響に怯える私たちに、問いかける力が残っているだろうか。

五〇余年前、身延山短大の今は消滅した木造の富田校舎一階東端に、和本の一切経が置かれた研究室があった。ある日のこと、室住先生は私に「ウダナさんってエライ人だな」とつぶやかれたことがあった。

「エライ」僧侶とはいったいどういうことを言うのか。あらためて考えてみようではないか。